

令和元年5月21日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02477

研究課題名(和文) 動的言語観に基づく話しことば文法と談話のインターフェイスの解明

研究課題名(英文) Investigating the interface between spoken grammar and discourse based on the dynamic view of language study

研究代表者

吉田 悦子 (YOSHIDA, ETSUKO)

三重大学・教養教育院・教授

研究者番号：00240276

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、多くの表現形式が、話しことばにおける反復使用と相互行為の過程を経て発生し(emerge)、定着するものであるという動的言語観に基づいて、文法と談話のインターフェイスを実現するメカニズムを明らかにすることである。

日英語対話コーパスを分析して、特定の表現連鎖のパターンについて複数言語間で比較対照した。「マグナ・シンタククス」(Miller 2011)という言語理念を導入し、「多重文法」(Iwasaki 2013)のモデルを分析の基盤とした。研究成果は、研究論文集及び入門解説書として出版準備中である。また対話データは、音声ファイル込みで国内の言語コンソーシアムで一般公開予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日英語対話コーパスの利用とその分析結果に基づき、一見、非標準的な表現連鎖が、対話においては相互行為に基づく重要な意味や機能をもつことを実証した点において学術的意義が大きい。特定の表現連鎖のパターンについて、複数言語間で比較対照し、言語事実を提示した。そして、対話構造の普遍性と文法・談話・語用論を結びつけるインターフェイスモデルの提案を行った。さらに、現実のコミュニケーションの場面を想定し、目の前にいる特定・不特定の相手に何をどのように伝えるかというコミュニケーション力重視の教育効果への示唆もあり、社会的意義も大きい。

研究成果の概要(英文)：Based on the recent dynamic view of grammar in pragmatically oriented language models, which have been established as magnasyntax (Miller and Weinert 1998/2009, Miller 2011) and the multiple-grammar model (Iwasaki 2015), we propose that although there is a significant difference between written and spoken languages with respect to the production level, the grammar that researchers study should consider every member of the set of syntactic constructions that are currently used in speech and writing. Observing how this perspective is represented in the actual interaction, the purpose of this study is to investigate the topic-chaining device in the stand-alone if-conditional clauses of English and their Japanese counterparts. The importance of the study is presenting the interface model of connecting the grammar, discourse and pragmatics from the contrastive view of linguistics over different languages. We are preparing for the publication of a book volume and and the data sharing.

研究分野：言語学

キーワード：談話 語用論 話しことば 文法 社会言語学 相互行為 対話コーパス 言語変異

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

対話研究は、コミュニケーションのメカニズムと対話理解プロセスの解明を追究することが目的であり、文理双方向からの研究の取り組みが近年急速に進んでいる学際的な研究分野である。一方で、貴重な発話データの集積である対話コーパスは、最も自然でかつ多様性に富む言語資源でありながら、その分析方法や利用に関する研究は複数の研究領域に分散しており、共有化とデータ整備が急務である。研究代表者も、既存の対話コーパスに共通の基本情報を付与し、相互利用可能な形で共有化していく取り組み(国立国語研究所共同研究プロジェクト(代表:伝康晴))の一メンバーとして当初参画した。この背景には、近年、書きことばや研究者の作例を中心に据えた、母語話者の直観に頼る言語分析の問題点が、自然発話データに基づく談話機能言語学の研究において繰り返し指摘されてきた事実がある。とくに、文を基本単位とする従来の形式言語学による文法のアプローチへの批判から、自然発話の中で進行する言語変化や言語の相互行為的側面を考慮した新たな文法論の構築が提案されている(Thompson and Hopper 2001; Miller and Weinert 2009; Iwasaki 2013)。対話コーパスは、こうした言語表現のパターンを行為の視点から観察できる貴重なデータであり、しかも複数の言語間で談話機能には、類型論的な共通点が見られる(Laury and Suzuki 2011)。一方、課題としては、文法論と自然発話データとの融合(Miller, 2011)があり、対照言語学的方法による一般化への議論が求められている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、多くの表現形式が、話しことばにおける反復使用と相互行為の過程を経て発生し(merge)、定着するものであるという動的言語観に基づいて、文法と談話のインターフェイスを実現するメカニズムを明らかにすることである。とくに、文法と談話の橋渡しを担っている語用論的しかけを解明することに焦点を絞り、以下の3つの視点から分析する:(1)対話コーパスの分析を通して、自然発話の基本単位が文ではなく、節や句、かつその連鎖であることを検証する。(2)この表現連鎖のパターンを複数言語間で比較対照し、話しことばの優位性を主張する。(3)母語話者の直観に頼らず、個人の発話解釈の揺れを許容する「マグナ・シンタクス」(Miller, 2011)という言語理念を導入し、変異プロセスにかかわる語用論的役割を明らかにする。さらに、対照言語学的視点から、類型論的な共通点について複数の言語間で検証し、対話構造の普遍性と文法・談話・語用論を結びつけるインターフェイスモデルの提案を行う。

## 3. 研究の方法

研究計画は3年間で(成果発表及び論文執筆のため、さらに1年延長)、初年度より、日英語対話コーパスの発話単位と既存の機能タグの整理、発話断片(Utterance Fragment:以下、UF)および逸脱文認定作業と追加データの選択を行った。2年目は、インターフェイスモデルを構築するため、相互行為言語学のアプローチを援用して対話コーパスを分析した。最終年度は「マグナ・シンタクス」の言語理念に基づき、対照言語学的視点から発話分析とモデルの検証を行った。

まず、初年度は、日英語の対話コーパス(課題遂行対話8対話と自由対話10対話)を検証し、対話における発話の基本単位が文ではなく、節や句、かつその連鎖であることを立証した。発話単位を再検討し、会話のムーブ・カテゴリーと呼ばれる課題に特化した発話機能分析を採用した(Carlettaほか1997)。2年目は、1年目に決定した分析方針と方法にしたがって日英語の対話コーパス、および多言語的に収集した事例の発話機能分析を行った。分析の手順は、日英語について、(1)さまざまな形式のUFや逸脱文の分布から、対話構造と発話機能のモデル

を策定した。(2)他言語の事例も観察しながら、文法構造の違いや談話的・語用論的要因を考慮して、インターフェイスのしくみを記述した。

3年目及び最終年度は、過去2年間にわたって行った日英語対話コーパスの利用とその分析結果に基づくインターフェイスのメカニズムをとりまとめた。

#### 4. 研究成果

本研究の研究成果として重要な意義は、2点ある。対話コミュニケーションにおける話題推移の特徴とそれをシームレスに繋ぐ調整機能の重要性を明らかにすることを目指している点である。さらに話しことばから書きことばの文法を構築するための視点として動的言語観を採用することで、個人における言語変化や多様な言語変異の受容を説明しようとする点である。

同時に、自然対話理解のプロセスとは、問題解決と相互理解のために、複数のパターンを駆使して修正や追加を繰り返していくという現象である。そのプロセスを記述し、そこで何が起きているのかに注目することで、対話者同士が、発話連鎖の連続性を瞬時に処理するようなやり取りのしくみの解明につなげることを実証してきた。そして、こうしたしくみでは、様々な談話レベルや異なるジャンルに応じて、その機能も異なることが明らかになってきた。

研究成果については以下の3点にまとめられる：

(1)日英語の文法上の差異や個別言語の違いはあるが、対照言語学的研究の視点に立てば、相互に比較可能な自然発話のコーパス分析に基づいて、文法・談話・語用論をつなぐインターフェイスモデルの提案をすることができた。

(2)UFや逸脱文を構造分析に組み入れることで、対話構造の整合性をよりきめ細かく可視化し、現実的な場面を想定しやすい対話プロセスの解明に向けた言語事実を指摘することができた。その一つとして、発話断片を含む日英語の節連鎖に着目し、文法現象の特徴を分析して、談話的、語用論的分析を融合的に取り入れた。

(3)言語教育的意義として、書きことばを標準とする文法偏重の教育の現状を見直すことを提案した。特に、目の前にいる特定・不特定の相手に何をどのように伝えるか、を学習者自身が意識できるような言語技術の習得の視点を取り入れた提案ができたことは重要である。また、対話的コミュニケーション力を重視することが教育効果につながる示唆も含めた。

最終年度から延長期間となったH30年度にかけて、過去3年間にわたって行った日英語対話コーパスの利用とその分析結果に基づき、特定の表現連鎖のパターンについて複数言語間で比較対照し、どのように問題解決と相互理解に貢献しているかを実証してきた。話しことばから書きことばへと縦断する現象を説明する枠組みとして、「マグナ・シンタックス」(Miller 2011)という言語理念を導入し、文法と意味の密接な関係から言語変異の多様性までを取り込む談話機能文法を構想した。一方で、日本語の事例を分析する枠組みとして「多重文法」(Iwasaki 2013)のモデルを導入し、その有効性を検討した。特に、相互行為に基づく表現連鎖に注目し、句表現のバリエーションは、説明や確認という発話機能を示す一方で、節の部分は次の話題へ移行するための展開部分となっているような自然対話理解のプロセスを実証した。

さらに、研究プロジェクトの延長期間において、以下のような研究成果が得られた。(1)研究期間中の国内及び国外学会等での発表内容を整理し、修正と追加を行った。(2)研究課題の研究成果をまとめた共同執筆のアブストラクトが採択され、研究論文集の中の1論文として、海外出版の準備中である。(3)本研究の入門解説書の出版に向け、分担執筆を取りまとめ、完成原稿を執筆中である。(4)対話データは、音声ファイルを含めて、国内の言語コンソーシアムへ提出し、一般公開準備中である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 11 件)

谷村緑・吉田悦子・仲本康一郎「課題達成対話における協働行為と inclusive “we”—英語を母語とする教師と英語学習者の非対称性に注目して—」『第 43 回社会言語科学学会研究大会予稿集』2019, 142-145. (要旨査読有)

<http://conference.wdc-jp.com/jass/43/contents/common/doc/P-15.pdf>

吉田悦子「学習者と母語話者の共同行為 (joint action) : 課題達成場面における共通基盤化」『日本語用論学会第20回大会発表論文集』第13号、2018 295-298. (要旨査読有)

[http://pragmatics.gr.jp/content/files/proceedings/Proceedings\\_13\\_2018.pdf](http://pragmatics.gr.jp/content/files/proceedings/Proceedings_13_2018.pdf)

Midori TANIMURA and Masayoshi Yamaguchi (2018) 'Politeness and Consensus Building Strategies in a Task-based Corpus of English Learners,' *Proceedings of the 4th Asia Pacific Corpus Linguistics Conference*. Sunport Hall Takamatsu, 415-422. (査読有)

谷村緑・仲本康一郎・吉田悦子「課題達成対話における談話構造の違い—目的を表すように」と「so that」を中心に—」『第 41 回社会言語科学学会研究大会予稿集』2018, 186-189. (要旨査読有)

久屋孝夫、「サミュエル・ジョンソンの規範主義とジェンダー問題—孤高の苦力:監視者が観察者か? 西南学院大学英語英文学論集 3号、2018 1-104.

谷村緑・吉田悦子「課題達成対話における日本人英語学習者の基盤化形成とジェスチャーの同期」『日本語用論学会第19回大会発表論文集』第12号、2017,289-292. (要旨査読有)

[http://pragmatics.gr.jp/content/files/proceedings/Proceedings\\_12\\_2017.pdf](http://pragmatics.gr.jp/content/files/proceedings/Proceedings_12_2017.pdf)

Kaori MIURA, *Taoreru-class unaccusatives and predication* 単著 2017年12月 Journal of the faculty of international studies of culture(68号) 127-148 (査読なし)

<https://drive.google.com/file/d/13v8sftcvK9lyKqHz4lhAabCBw-bBAUun/view>

Kaori MIURA, *Affect-feature and VP-internal adjuncts in Japanese* 単著 2017年3月 Journal of the faculty of international studies of culture(66号) 61-88 (査読なし)

<https://drive.google.com/file/d/0B6dcLw16vlhmWnJOT01MTUxCdlk/view>

María Basterrechea and Regina Weinert\_ (2017) *Examining the concept of “subordination” in spoken L1 and L2 English. The case of if-clauses. Tesol Quarterly* 51(4):897-919.

久屋愛実「Belfast 英語における平叙文と平叙疑問文の文末上昇調にみられる音響的差異—コーパスを利用したイントネーション研究—」『英語コーパス研究』第 23 号、2016 年、33-44 (査読有) [http://jaecs.com/jnl/jnl\\_23.pdf](http://jaecs.com/jnl/jnl_23.pdf)

吉田悦子「孤独な if 節をめくって:」*JELS* 32 2015年(日本英語学会第32回大会論文集) 179-185.

〔学会発表〕(計8件)

三浦香織, An Adjunction Approach to the PSP Construction in Japanese, 2018年日本言語学会第156回大会

Kaori MIURA, Psych-adverbials and a layered VP in Japanese, First Joint Meeting with Fukuoka Linguistics Circle and Neo-Grammar Circle, Fukuoka. 2018

Etsuko YOSHIDA and Jim MILLER, 'The multiple uses of conditionals as in subordinate clauses in discourse organization: A cross-linguistic analysis' International Pragmatics Association 2017 (国際学会) 2017

吉田悦子「学習者と母語話者の共同行為 (joint action) : 「課題達成場面における共通基盤化」日本語用論学会第20回大会 (国際学会) 2017

Kaori MIURA 'Agentivity in the unaccusative structure' 2017年日本語学会第154回大会

三浦香織 「日本語の非対格構造における付加詞について」2016年2016年度FLC第3回例会

Etsuko YOSHIDA 'A cross-linguistic variation of fixedness of lone if-conditional clauses in spoken discourse' International Pragmatics Association 2015 (国際学会) 2015

Midori TANIMURA, Etsuko YOSHIDA, Koichiro Nakamoto and Kazuhiro Takeuchi 'How people achieve common ground in asymmetrical setting of task-based dialogues: Comparing pairs of native English speakers to pairs comprised of a native English speaker and a non-native English speaker,' *British Association of Applied Linguistics (BAAL)* 2015 (国際学会)

〔図書〕 (計4件)

Aimi, KUYA *The Diffusion of Western Loanwords in Contemporary Japanese: A Variationist Approach*, 2019, Hituzi Syobo 総ページ数229ページ。

Kaori MIURA (Kunio Nishiyama, Hideki Kishimoto, Edith Aldridge 編) *Topics in Theoretical Asian Linguistics: Studies in honor of John B. Whitman*, John Benjamins Publishing Company: Amsterdam. 2018 (総ページ数 286 ページ、担当: 第11章 Experimental Study of Children's Comprehension of Lexical and Productive Causatives in Japanese, 229-251. 共著者: Kyoko Yamakoshi, Kaori Miura, Hanako Jorinbo, Kayoko Angata and Kaori Yamasaki

Keith Brown and Jim MILLER *A Critical Account of English Syntax*, 2016 Edingurgh University Press: Edinburgh. 総ページ数296ページ、担当は共同部分が多く、区分不可。

Etsuko YOSHIDA, In Ken Nakagawa, Akiyuki Jimura and Osamu Imahayashi (eds.) *Language and Style in English Literature*, Keisuisha (2016) 総ページ数231ページ、担当部分 pp.221-231.

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年:  
国内外の別:

取得状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:

取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

国立情報学研究所・音声資源コンソーシアム（NII-SRC）にてコーパスの提供済み（公開取り扱い確定）

## 6．研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：谷村 緑

ローマ字氏名：(TANIMURA, Midori)

所属研究機関名：京都外国語大学

部局名：外国語学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：00434647

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：久屋 孝夫

ローマ字氏名：(KUYA, Takao)

研究協力者氏名：三浦 香織

ローマ字氏名：(MIURA, Kaori)

(海外研究機関 国内)

研究協力者氏名：久屋 愛実

ローマ字氏名：(KUYA, Aimi)

(海外研究機関)

研究協力者氏名：ミラー ジム

ローマ字氏名：(MILLER, Jim)

研究協力者氏名：ヴァイナート レジーナ

ローマ字氏名：(WEINERT, Regina)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。